



横浜市立富岡小学校

学校だより2月号



餅つきから思うこと

副校長 松口 真人

1月の下旬から「10年に一度」と言われた寒波の影響でとても寒い日が続いています。そんな寒い日でも、休み時間になると校庭からは子どもたちの楽しそうな声が聞こえてきて、元気をもらえます。

さて、1月は富岡の地域でも餅つきが行われました。杵の重さに戸惑いながらもうれしそうに餅つきを体験している本校児童の姿も見ることができました。少しずつですが、コロナ前に行っていた年中行事が開催され、うれしく思います。

私が小学生のころ、年末には親戚が福島にある祖父母の家を集まり餅つきを行っていました。

餅つきの前日から祖父母の家に泊まるのですが、朝になると餅米をせいろで蒸すいい匂いで目が覚めます。大人たちが準備をしている間、子どもたちは稲刈りが終わった田んぼで野球をしたり、鬼ごっこをしたりして待っていました。

朝の10時ごろから餅つきが始まります。つき始める前に、祖父が杵で臼の中の餅米をつぶしていきます。これは必ず祖父が行っていました。力を込めて餅米をぐぐぐとつぶす祖父のかっこいい姿を今でもよく覚えています。

餅をつくのは大人たちの役割です。祖父の家にあった杵はとても重く、小学生ではうまく扱えません。どうしてもやってみたくて母に頼み込んでやらせてもらったことがありましたが、臼をたたき木くずが餅の中に入ってしまい、「10年はやい。」と笑われました。

つき終わった餅は、ビニル袋に入れて、のし棒で伸ばします。これは小学生の仕事です。つきたての餅は、とても熱いのですが、柔らかいので子どもの力でも伸ばすことができます。できあがったのし餅は、後日、切って焼いて食べます。手をついた餅は、なめらかでおいしく、何個でも食べられそうでした。のし餅以外にも、祖母が作ったあんこをつきたての餅で包んで作った大福もちも大好きでした。市販の大福と違って冷めるとかちかちになってしまいますが、トースターで焼いて食べると絶品でした。

餅つきは1日がかりの大仕事でしたが、親戚が集まって、わいわいと飲んだり食べたりしながら楽しくコミュニケーションをとる大事な行事でした。

餅つきは一人ではできないので、地域で行う餅つきには、皆の連帯感を高め、喜びを分かち合うという社会的意義があるそうです。私が住んでいる町内会でも以前は餅つきを行っていましたが、残念ながら今年も中止でした。以前のように、大勢が参加できる地域の行事が行われるようになることを祈るばかりです。

6年生は「卒業まで残り〇日」と書かれた日めくりカレンダーを作っています。今年度も残り2か月です。クラスの友達との時間を大切に、ともに認め合い、教え合い、輝きながら進級、進学できるよう、職員一同、指導、支援してまいります。保護者の皆様、地域の皆様のご理解、ご支援のほど、よろしく願いいたします。